



Title	アメリカのヒップホップと「Bitch」：意味の取り戻しとミソジニーの間で
Author(s)	金, 範俊
Citation	フィロカリア. 2026, 43, p. 47-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アメリカのヒップホップと「Bitch」

―意味の取り戻しとミソジニーの間で―

金 範 俊

はじめに

- 一. 差別用語の意味の取り戻し
 - 二. 楽曲での差別用語の分析方法
 - 三. アメリカのヒップホップにおける「Bitch」
 - 四. 楽曲での差別用語として「Bitch」の特殊性
 - 五. 「Bitch」とヒップホップ・フェミニズム
- 終わりに

はじめに

本論文はマイノリティの自己表現の手段としてのヒップホップの役割を明らかにすることを目指しており、特にヒップホップの楽曲で差別用語が使われる事例に注目している。筆者はアメリカのヒップホップにおけるNワード、日本のヒップホップにおける「ジャップ」「外人」「チョン」の使用例を、被差別者が自ら差別用語を使う「言葉の意味の取り戻し (reappropriation)」の概念を用い

て分析し、そのような使用が聴き手に表現者の経験をどのようにコミュニケーションするかについて論じた。ここでは、Nワードの場合、その言葉の意味の取り戻しの動きがヒップホップの誕生以前から黒人社会の中にあつたことと比べ、日本のヒップホップで見られる「ジャップ」「外人」「チョン」の使用例はヒップホップでの文脈なしでは理解が難しいことを明らかにし、それぞれの用例が持つ可能性や限界について考察した「金、2021」。

ヒップホップを用いたマイノリティの自己表現について論じる際に、「Bitch／ビッチ」はとても重要な言葉であると言えよう。Nワードと共に現代のアメリカのヒップホップで頻繁に使われる差別用語である「bitch」は、その使い方においてヒップホップで多用される他の差別用語とは大きく異なり、違う理解と考察を要する。本稿では、アメリカのヒップホップにおける「bitch」の用例を分析し、その言葉が表す社会的ステイグマの特殊性、そしてヒップ

ホップを用いたマイノリティーの自己表現の意義を検討する。

一、差別用語の取り戻し

「誰かの目的のために何かを取り戻す・再占有する」ことを意味する「[reappropriation]²⁾」は、差別用語を含む言葉においても行われ、本稿ではそれを「差別用語の意味の取り戻し」と訳して使う。差別用語の意味の取り戻しとは、本来差別用語として使われるある言葉を、被差別者の個人また集団が特定の意図を持って自ら使い、その言葉の意味の変化を目指す概念で、本研究の議論はGalinsky, Hugenberg・Groom・Bodenhausenの先行研究が提示した差別用語の意味の取り戻しの理論とモデルに基づいている。差別用語が使われた際に明らかになるものは、ある人や集団に対する社会的ステイグマであり、個々人はそのステイグマから自分の尊厳を守るために様々な戦略が使える。しかしそれは根本的な問題解決にはなれず、そのステイグマ自体の不条理性に立ち向かうためには集団的な対応が必要となる。「差別用語の意味の取り戻し」は、その際に被差別者集団が社会的創造性を用いてステイグマと立ち向かう手段の一つである。

[Galinsky, Hugenberg, Groom & Bodenhausen, 2003, 227-228]。

Galinsky 他の論文では差別用語の意味の取り戻しの三つの段階を提示している。第一段階は被差別者の個々人が自分をその差別用語で呼ぶことである。ただしこの使用は単純に自らを差別用語で呼ぶだけではなく、他人がその言葉を武器として使うことや本来の差

別の仕組みを喚起させないために、使用者本人の自尊と自己愛に基づいた堂々とした態度が必要とされる。

第二段階は、被差別集団の集団的な使用である。持続的で集団的な使用の結果として、内集団の結束の強化、誇りの高揚、そして社会的なステイグマの代わりにより肯定的な意味合いが言葉と結びつけられることが期待できると先行研究は提示している。

第三段階は、第二段階の結果、つまり被差別集団が意図的かつ集団的に差別用語を使いつづける結果、外集団までを含む社会全般が、本来その差別用語と関連付けられていた社会的ステイグマ自体を再検討する段階である。しかし、外集団・社会全般による特定集団への社会的ステイグマの再検討の程度は、個人や社会集団によって差があり、絶対的な基準でその成功と失敗を論じるのではなく、スペクトラムとして理解すべきであると先行研究は提案している [Galinsky, Hugenberg, Groom & Bodenhausen, 2003]。

一、楽曲での差別用語の分析方法

差別用語の意味の取り戻しの概念は、差別用語が「良い言葉・悪い言葉」の単純な理解を超えて、様々な意図と意味を持つて使われていることを表す。ヒップホップでの差別用語もその多様なニュアンスをより細かく理解するために、著者は二つの軸、1) 誰が誰に向けて使うのか、2) どのような意味を意図して使うのか、を基に楽曲での差別用語の分析のモデルを提案する。

表1 「使い手・指す対象」／「意味」による差別用語使用の分類

	本来その言葉が 持つ別の意味 (別)	従来の否定的で 差別的な意味 (否定)	使用者が付与した 肯定的な意味 (肯定)	新しい意味 (新)
外集団 →外集団 (OO)	OO 別	OO 否定	OO 肯定	OO 新
外集団 →内集団 (OI)	OI 別	OI 否定	OI 肯定	OI 新
内集団 →内集団 (II)	II 別	II 否定	II 肯定	II 新
内集団 →外集団 (IO)	IO 別	IO 否定	IO 肯定	IO 新
内集団 →物・概念 (IT)	IT 別	IT 否定	IT 肯定	IT 新
外集団 →物・概念 (OT)	OT 別	OT 否定	OT 肯定	OT 新

* O : Out-group (外集団)、I : In-group (内集団)、T : Thing (物・概念)

例えば、ある特定の集団に向けて社会的ステイグマを表す「差別用語」を、その集団の一員ではない人が(外集団)その当事者に向けて(内集団)、価値や尊厳を傷つけるために使うことは(否定)、OI否定型の用法と分類できる。

差別用語の意味の取り戻しの場合、被差別者が(内集団)自分や他の被差別者に向けて(内集団)、既存の差別的な意味ではなく友情・自信・愛・信頼・自負など肯定的な意味を込めて使うことは(肯定)、II肯定型と分類できる。次の章ではこのモデルを用いて、アメリカのヒップホップでの「bitch」の使用例から、それらの用法が示す意味や内集団・外集団の境界について分析する。

三. アメリカのヒップホップにおける「Bitch」

本来「犬のメス」を意味する英単語の「bitch」は、現代には女性に対する差別・軽蔑的な言葉として理解されている。^③現代の「bitch」の意味や用例は大変多様であり、ヒップホップでも「bitch」は女性に対する差別的な用法から女性アーティストによる意味の取り戻しまで、様々な種類の使い方が確認できる。

三―一. 外集団による使用

● ミソジニー的な用法 (OI否定型)

ヒップホップの中のミソジニーが「bitch」を用いて表現される事例は無数にある。N.W.Aの楽曲『Just Don't Bite It!』(1990)は、

男性の欲望を満たすための性的対象として女性を「bitch」と表現すると同時に、男性を性的に満足させられない女性を劣等な存在と描いて「bitch」と呼び、またお金のために性行為を提供する女性をけなす際に「bitch」を使っている、女性の性的対象化、価値・尊厳に対する冷笑的な描写が見られる。また性的に開放的ではない女性を「stuck-up bitch」と呼んでいて、「難しい」「言うことを聞かない」「高圧的」な女性に対する敵意をも「bitch」を使って表現している。

「ビッチなんて大したもんじゃないよ」と翻訳できる「bitches ain't shit」という表現は、Dr. Dre 'Future' Eminem など著名なアーティストはもちろん、多くのヒップホップアーティストによって楽曲のタイトルや歌詞に使われ、ヒップホップのミソジニーを代表するフレーズのひとつとなっている。またヒップホップで多用される「get bitches」という表現は、「get money」と同じく「手に入るもの」や「所有するもの」として女性を対象化し、その価値を物に等しい存在として描写している。⁽⁴⁾

● 男性性を攻撃する用法（OO否定型）

Owari (2018) によると、欧米社会の男性に多大な影響を与える支配的 (hegemonic) 男性像は、男性に家族を扶養して保護する役割を求め、また仕事関係や社会関係において自分より弱い相手を圧倒することを求める「Owari」2018、第3章。他の男性より

優位に立つための競争や闘争の構図はヒップホップにも見られ、自分の優位を主張・描写するだけではなく、相手をけなす表現も使われていて、その際に「bitch」が頻繁に使われる。2Pac は「Hit 'Em Up」(1996) で、攻撃相手の Notorious B.I.G と彼の仲間たちを「mark-ass bitches」と呼んでいて、男性が他の男性の男性性を攻撃する用法の一例である。

この際の「bitch」は、従来「bitch」が示す否定的な「女性らしい」だけではなく、「男性性の不在」を広義的に表すと解釈できる。Schoolboy Q は楽曲「Numb Numb Juice」(2019) で、「お喋りが好き (gossip)」や「人を嫉妬する (hating on another nigga)」など、従来女性と結びつけられる否定的な属性を使って「bitchらしいこと」を描写するが、同時に「銃を撃つべき時に銃が故障したふりをする (acting like it jam)」や「犯罪率が高まる夏には外に出るのを怖がる (staying in because you know it's summer)」など、強い男性像をパフォーマンスすることに失敗することをも「bitchらしさ」と定義している。これは「女性らしくない」だけではなく「強い男性性」をパフォーマンスすることをヒップホップが求める一例であって、後述する女性アーティストによる「bitch」の使用から同じ構図が見られる。

● 肯定的な意味の用法（OI肯定型）

Notorious B.I.G. の「Me & My Bitch」(1994) は、外集団によつ

て「bitch」が肯定的に使われた興味深い事例である。この曲ではある架空の女性を「bitch」と呼ぶと同時に、様々な角度から彼女を具体的な描写する。彼女は性的に魅力的であるが、彼女の性的側面は曲を通して一度も否定的に描写されず、彼が彼女を愛する理由として描かれている。彼女は、金銭管理や彼の犯罪活動にも関わるほど信頼できる存在で、主導的で生活力が強く、彼の間違いを我慢せずに立ち向かう性格を持っていて、Notorious B.I.G.はそんな彼女と一緒に寝て泣いて、一緒に死にたいと歌う。曲の最後では、彼を狙った彼の敵の攻撃で彼女が殺され、Notorious B.I.G.は彼女の死を「親友が殺された (They killed my best friend)」と表現する。曲全般に渡って見られる肯定的な描写は、前述のミソジニー的な用法とは大きく異なり、外集団から内集団に向けて「bitch」を肯定的な意味で使った珍しい例として分類できる。

三二 内集団による使用

●意味の取り戻し的な用法 (力の逆転・II肯定型)

女性アーティストが自らを「bitch」と呼んだ初期の例として、Roxanne Shanteのアルバム『The Bitch is Back』(1992)がある。彼女は自分のスキルを誇張し、上述した「bitches ain't shit」に相應する表現として『Brothers Ain't Shit』という収録曲で男性たちの行動を批判して彼らをけなす。彼女が自らを「bitch」と呼ぶのは収録曲『Straight Razor』が唯一であるが (『One bad bitch』、ア

ルバムのタイトルと収録曲の内容からして、男性優位のヒップホップで、実力とその構図を転覆する人物として自身を「bitch」を呼んでいて、男女間の優越関係に挑戦する意図が解釈できる。

Lil' Kimは『Queen Bitch』(1996)で「bitch」に様々な表現をくっ付けて、新たな「bitch像」を提示した。ラップスキルとその結果で得た成功はもちろん、「女王」の支配的な地位 (queen bitch, supreme bitch)、殺人も怖がらないヒップホップの男性性のパフォーマンスを「bitch」と結びつけて表現する (murder scene bitch)。より刺激的で直接的な表現で自分を「支配的な存在」と位置付けて、男女間の力の逆転をより明確にする際に「bitch」を使っている、これは金 (2021) が「力の逆転」と称した用法と見なすことが出来る [金、2021、38]。

しかし、Lil' Kimの「bitch」の使用は、男性社会でスキルや暴力、タフさを使って優位に立つ所に留まらず、女性の性的魅力を武器にする際にも使われる。Notorious B.I.G.との共作『Get Money』(1996)で、彼女は自分の性的魅力をアピールすると同時に、彼女自身の性的満足について歌い、金銭的な成功を重要視し、パートナーとの葛藤に暴力を使ってまで立ち向かう人物として自分を描写するなど、性的な客体ではなく性的・社会的な側面で主体的な女性像を「bitch」を使って表している。

Lil' Kimの「bitch」の用法から、男性優位のヒップホップで女性アーティストが自分の主体性を表現するための二つのルーツが読

み取れる。それは1) 競争・財力・暴力など、男性社会のマッチョイズムの価値をパフォーマンズして「男と等しい」や「男より優れている」ことを証明すること、2) 性的主体として自分の魅力と欲望と理解し、それを武器化すること、である。「Gangsta Bitch」「Bad Bitch」「Boss Bitch」など、現代の女性アーティストによっても多用されるこれらの「bitch」の表現は、「bitch」に結び付けられる従来の抑圧の構造を克服し力を逆転させ、女性の主体性を披露することで言葉の意味の取り戻しと分類できる。

●意味の取り戻しの用法（内集団同士の使用・I-I肯定型）

女性アーティストが他の女性を肯定的な意味や文脈で「bitch」と呼ぶことから、言葉の意味の取り戻しの側面が見られる。Cardi Bの『Money』（2018）は「My bitches all bad, my niggas all real」という歌詞から始まり、男性たちの「リアルさ」を高く評価することと同じく、彼女の周りの女性たちの魅力を「bad」を使って高く評価して、好意を表している。Megan Thee Stallionは『Diamonds』（2020）で「Date night with my bitches」「Cash Shit」（2019）で「My bitches hustle, make money together」など、他の女性への友情や連帯感、お金を稼ぐ経済的な主体として彼女らを高く評価する文脈で「bitch」を使っている。女性二人組のラップグループシティー・ガールズ（City Girls）の『That's My Bitch』（2020）でメンバーJTは、自分ともう一人のメンバーヤング・マ

イアミ（Yung Miami）の性的な魅力を誇張すると同時に、自分たちは拳銃を持ついて、喧嘩になった時はYung Miamiと一緒に戦うことを歌って自分たちのタフさを誇張するなど、上述した「bitch」を使った力の逆転を、他の女性へ拡張して使っている。

Nonameによる『black mirror』（2023）での「bitch」の使用は、力の逆転ではない使い方として興味深い。

“She’s a shadow walker, moon stalker, Black author Librarian,
contrarian The state say we dead, we say we not That’s my
bitch, I believe my sister”

曲を通してNonameは社会主義者としての自分の政治的なアイデンティティと自己矛盾、社会から求められる女性性の束縛について歌っている。政府によって「存在しない」と規定されているNonameと彼女のような女性たちは、自分たちの存在を主張し、その際にNonameは「bitch」と表現したとある女性を登場させて、彼女への姉妹愛と信頼を表している。性的魅力や財力・成功・物理的なタフさなどを用いて男性社会内で力を逆転させるのではなく、女性として共有する苦難を基に姉妹愛を表現する際に「bitch」が使われた用法は極めて珍しく、意義深いと思われる。

●内集団による差別的な用法（I I否定型、I O否定型）

女性アーティストによる「bitch」の使用には、否定的な意味での用法も存在する。その使い方には1）一般的に否定的な文脈での使用、2）「bitch」が持つ女性に対する特定の社会的ステイグマを喚起させて他人を攻撃する使用、3）男性性の不在を攻撃する使用がある。

Nicki Minajの『Want Some More』（2014）は、内集団による「bitch」の否定的な用法が総合的に見られる例である。彼女は、彼女に挑戦する他の女性ラッパーたちをけなし、彼女らと同レベルで競争していないことを誇張する際にその女性たちを「bitches」と呼んだ。この際の「bitch」は否定的な文脈で女性を呼ぶために使われているが、「bitch」に関わる特定の社会的ステイグマを喚起させる用法ではない。

しかし、彼女は同じ曲で「These bitches suck, so I nickname these bitches "Bj"」と歌う。「あいつらはダサイからBjとあだ名を付けてやる」と翻訳できるこの歌詞は、「ダサイ」を意味する「suck」が「舐める」の意味を持つことから、オーラルセックスを意味する「Bj」に移るワードプレイで、Nickiは競争相手の女性ラッパーたちのラップの下手さを、女性の性的対象化と結びつける。男性にオーラルセックスを提供する女性を男性の満足のために存在するものと見下す視線が前提となっているこの攻撃で、彼女はミソジニーの構造を用いて相手の女性を攻撃している。

Nickiの「bitch」を用いた攻撃は女性に限らず、男性へ向けでも使われる。「no bitch niggas on a bitch album」で彼女は「bitch niggas」という表現を使って、自分のアルバムにはそのような「ビッチな男」は参加していないと誇張する。

このような女性アーティストによる「bitch」の否定的な使用は、肯定的な意味合いの「bitch」の使用と併用される部分でより複雑化する。アジリア・バンクス（Azealia Banks）の『1991』（2012）は「Cause you gonna be a bitch nigga, Ima be that bitch, what?」と、ある男性の男性性を「bitch」を使ってけなした直後に「注目の」や「次のスター」と理解できる「that bitch」で自分自身を肯定的に「bitch」を使っている。Lattoは2021年ラジオ局Power106 FMでのフリースタイルラップで、自分のラップスキルを誇張する文脈で自分を「rap bitch」を呼ぶと同時に、「Y'all bitches passed around」の歌詞で、金銭的な対価のために男性たちに「使いまわされている」女性たちを「bitch」と使ってミソジニー的な観点でけなしている⁽⁵⁾。

女性アーティストが他の女性を攻撃するためにパフォーマンズするミソジニーをOwareは「デイスのためのミソジニー」と分類している。そのように女性アーティストがミソジニーをパフォーマンスする際、男性主流社会の抑圧的な「女性観」を強化することに繋がるが、同時に「男性性」を女性がパフォーマンズすることは、一方女性性による新たな表現の可能性も示唆する [Oware, 2018]。あ

る差別用語が否定的な文脈で使われ、従来の差別的な意味で使われ、また取り戻し的な用法で使われることが全て共存していることは、ヒップホップの楽曲で使われる他の差別用語には見られない「bitch」だけの特徴である。

三―三. その他の用法

●無形のことを指す用法（OT否定型、IT否定型）

男性や女性ではなく、無形のことを「bitch」と呼ぶ用法もあり、Nasの『Life's a Bitch』（1994）がその代表的な例である。ヒップホップで最も有名な表現の一つである「Life's a Bitch」はジャンルの中で無数に引用され、オンライン歌詞データベースのGenius.comは「Life's a Bitch」の引用例を紹介するページで70人以上のアーティストたちを挙げている。⁽⁶⁾

“Life's a bitch and then you die, that's why we get high

‘Cause you never know when you're gonna go”

生きることの辛さと難しさ、いつ死ぬか知れないなど不安の中で快樂を楽しむことを歌うこの曲で、「bitch」は「人生」の概念を否定的に描写するために使われている。この曲では「bitch」を使った「人生」の擬人化は読み取りにくいが、この歌詞を引用した多くの曲で「人生」は「bitch」と擬人化され、性的に征服する対象と

して描かれ、被害を与える危険性から警戒すべき対象として描かれるなど、従来の「bitch」が表すミソジニー的な表現が使われることが多い。このような「bitch」を使った無形の概念の擬人化は、「bitch」が持つ否定的な意味合いから「女性」を分離することが難しく、ミソジニー的な使用の延長であると言えよう。

●LGBTQアーティストによる使用

根強いヒップホップの中のホモフォビア歴史の中でもLGBTQのヒップホップへの参加や実践、そしてディスコやスラング文化などLGBTQ文化がヒップホップに与えた影響はヒップホップの誕生期から確認できる [Oware, 2018]。

2019年ゲイであるとカミングアウトしたLil Nas Xは『Industry Baby』（2021）で以下の歌詞を歌っている。

“I don't fuck bitches, I'm queer, hab

But these niggas bitches like Madea”

ゲイであるため「bitchとは寝ない」の文脈で使われた「bitch」は、女性を性的対象化する異性愛者の男性アーティストによるミソジニー的な用法と大きく変わらなれないと思われる。次の行では「あいづら（男性）」はMadeaみたいにbitchだと「bitch」を使っている。Madeaは黒人映画監督・脚本家・俳優で知られているTyler Perry

が制作し長年人気を得ている映画シリーズに登場する人物で、Tyler Perry 自身が女装をして演じるそのキャラクターに例えて他の男性たちを「bitch」と呼ぶ用法は、「女性らしさ」を理由に男性をけなす、ミソジニー的な用法である。Lil Nas X は同性愛者としての自分の性的欲望や好みを果敢に描写すると同時に、「bitch」を用いたミソジニーの再生産にも参加して、ヒップホップ中に存在するLGBTQの多面性を見せると言えよう。

レズビアンである Young M.A の「bitch」の使用も興味深い。彼女は『OOOUU』(2016)で「Dyke bitches talking out they jaw」と歌い、レズビアンに向けた差別用語の「dyke」と「bitch」を結び付けて、また「お喋り」という「bitch」のミソジニー的な意味を結合させている。自分を性的対象化せず男性的な目を持ち、暴力・力など男性性を強調する歌詞を書く Young M.A の「bitch」の使用は、ミソジニーを通した男性性のパフォーマンスと読み取れる。しかし彼女は『Bad Bitch Anthem』(2020)では、性的・経済的・社会的に主体的な女性像を描写する際に「boss bitch」を使い、また「彼女はbitchではなく女王 しかしそれでもbitchと呼ぶなら That Bitch・Bad Bitchと呼べ (She not a bitch, she a queen But if you say a bitch, say she that bitch/bad bitch)」と歌っている¹⁰。「bitch」を肯定的な意味と結びつけて使う用法は意味の取り戻しの使い方に極めて似ている。

Saucy Santana はカミングアウトしたゲイのアーティストで、ま

たドラッグ (drug) 文化の影響を受けたビジュアルと歌詞の内容で知られている。『Lit Bitch』(2021)で Saucy は自身ことを「イケてる (lit) bitch」と表現し、他人に向けては冷笑や冷やかしの意味で「bitch」を使っている。ゲイとドラッグコミュニティによる「bitch」の使用は、内集団内の連帯感など肯定的な意味を表すように再占有されたことが研究されており [Mann, 2011]、 「bitch」がゲイコミュニティにおける「内集団」を指すと理解したら、Saucy の「bitch」の用法は、女性のアーティストが「bitch」をI-I肯定型とI-I否定型の用法を混せて使用していることと類似していると思われる。

四. 楽曲での差別用語として「Bitch」の特殊性

バックラッシュの不在

「bitch」のヒップホップでの使用がNワードの事例と大きく異なる点は、外集団による使用に対する集団的な反発、バックラッシュが見られないという点である。Nワードの場合、外集団（特に白人）による使用は極めて少なく、Eminem の場合デビュー前にNワードを使ったことが知られてから謝罪声明を出した⁹。また内集団から外集団の特定の人にNワードの使用を「認める」という「Nワードパス」の概念が存¹⁰し、またラテン系やアジア系のアーティストによるNワードの使用に対して内集団との距離や真正性の証明が求められるなど、外集団がその言葉を差別的にまたは自身の利益のために使うことは内集団によって厳しく規制される。

ヒップホップの中で「bitch」の使用に対する反発は過去には例がある。Queen Latifah の『U.N.I.T.Y.』(1993) は、曲を通して「Who you calling a bitch?」や「You ain't a bitch or a ho」のフレーズを繰り返す。路上で自分に性的ハラスメントを抱えた男性に「bitch」と呼ばれた際に物理的に抵抗して男性社会のミソジニーを批判し、「Gangsta bitch」と自分を呼んで暴力的な男性性をパフォーマンスする女性を批判するこの曲は、ヒップホップにおける「bitch」の否定的な使用を批判する稀な例である。

ヒップホップの外からの反発の例も過去には存在した。ギャングスタ・ラップに対するアメリカ社会からの反発は80年代から90年代に渡って可視的であり、政治学者で黒人公民権運動の活動家であったC. Delores Tuckerが行った不買運動やデモが有名である。彼女は1993年の記者会見でギャングスタ・ラッパーたちが「hoes」と「bitches」の言葉で女性の価値や尊厳を傷つけていると主張し、強く批判した[Conway, 2015]。しかし2025年の現在には、外集団による差別的な使用がメインストリートの楽曲でも頻繁に見られ、有意義な規模の反発や内集団による規制の動きは見られないと言えよう。このようなバックラッシュの原因やそれが意味することについては別の機会により詳しく論じる。

「bitch」を通したミソジニーの再生産

「bitch」の外集団の差別的な使用、そして内集団による否定的

な用法が言葉の意味の取り戻しの用法と共存していることは、ミソジニーが実践者たちによって再生産されていることを意味する。その言葉が持つ従来の差別的な意味を、内集団に向けて使う事例が極めて少ないNワードと比べると、「bitch」を用いたミソジニーの再生産は特徴的であると思われる。

特に女性アーティストによるミソジニーの再生産に関しては、彼女らが「男性性」をパフォーマンスする理由から考えるべきである。「Gangsta bitch」などのモチーフから分かるように、ヒップホップで女性アーティストたちは男性性をパフォーマンスすることでヒップホップの主流から認定を得て、それを文化資本として蓄積してきた。またその男性性のパフォーマンスの過程でミソジニーをもパフォーマンスすることで、彼女ら自身はそのミソジニーの「主体」としてその「対象」から逃れることが期待されると推測できる。Nicki Minajが楽曲『The Crying Game』(2014)でデート暴力において「被害者」ではなく「加害者」として自分を描写したことは、女性アーティストがミソジニーの「対象」にならないために「主体」となる仕組みを示唆する。

「bitch」の意味の取り戻し

意味の取り戻しの観点から「bitch」を考える際にはいくつかの話題がある。「bitch」を肯定的なイメージや文脈と結びつけて「自分」を指す用例が多く見られる一方で、内集団の「他の人」に向け

た否定的な意味での使用が持続的に見られることは、先行研究が提示した意味の取り戻しの第二段階の「差別用語の内集団による集団的使用」に「bitch」が到達するための課題を示唆する。

もう一つの話題は「bitch」についての内集団と外集団の範囲である。先行研究によると、内集団内の結集が強いほど意味の取り戻しが起こりやすい [Galinsky, Hugenberg, Groom & Bodenhausen, 2003, 239]。前章の分析で「bitch」は必ずしも「性別」に基づくのではなく、家父長制が規定する性役割のパフォーマンスによってその範囲や境界線が流動的に変わることが確認できた。その言葉が示す社会的ステイグマの対象が流動的に変わるとは、「bitch」においてそれを取り戻す「内集団」が誰なのかの議論を複雑化する。

「取り戻す意味は何か」も、重要な話題である。Nワードの場合、従来の差別的な意味の多くは「怠慢」「頭が悪い」「劣等」「貧乏」など、世間一般的に「否定的」と見なされる属性であり、問題はこれらの否定的な属性が「黒人」という特定のグループに結び付けられることである。ヒップホップで見られるNワードの意味の取り戻しは、これらの属性と「黒人」を切り離し、黒人であると同時に「勤勉」「天才」「優秀」「お金持ち」という新しい意味を付与することである。しかし「bitch」の場合、「性的に放恣」や「感情的」など、その言葉が示す属性が「否定的」と見なされること自体がミソジニー的であり、女性アーティストは「性的に紊乱」ではなく「開放的な性的主体」として自分を「bitch」と呼んで意味の取り

戻しを試みるが、ミソジニー的な観点を堅持する人にとってはその「否定的」な属性を繰り返すことに見える可能性があると推測できる。

五: 「Bitch」とヒップホップ・フェミニズム

楽曲での「bitch」の使用の考察は、ヒップホップの中の根強いミソジニーと、個々人がその中で生きていくために設定する関係の複雑さを明らかにする。特にミソジニーに抵抗してそれを乗り越えと同時に、場合にはそれをパフォーマンスする女性アーティストたちの作品活動を、矛盾していると見なすことも出来るであろう。

作家ジョーン・モーガン (Joan Morgan) は記念碑的な著作 *When Chickenheads Come Home to Roost: A Hip-Hop Feminist Breaks It Down* (1999) で、彼女の個人史を基にヒップホップとフェミニズムを考察した。ヒップホップの中のミソジニーに飽きて、また主流フェミニズムからはヒップホップを楽しむことで本当のフェミニストではないと言われた経験を基に、彼女は「ヒップホップ・フェミニズム」を初めて提唱した。

現代フェミニズムの中に存在する人種・階級・教育差を巡る問題を総合的に考察した彼女は、フェミニズムの中の多様な声の並置からこそ真実が見いだせると主張する。Morgan によるヒップホップ・フェミニズムは、白か黒かではなく「グレー」と関わるフェミニズム (「a feminism brave enough to fuck with the grays」) として

「Morgan, 1999, 58」¹、インターセクショナルな視点を持って行動

を起こしながら、同時に矛盾した存在としての「自分」を肯定して生きていくことを女性に呼びかける。

Megan Thee Stallion の『B.I.T.C.H.』(2020) の「bitch」の使用は、ヒップホップ・フェミニズム的なアプローチが見られる例であり、曲の歌詞は彼女が交際相手の男性に話しかける形を取っている。この曲で彼女は経済活動の主体として、トゥワーク (work、激しくお尻を動かす踊りのスタイル) を楽しむ性的主体としての自分を描写すると同時に不完全で矛盾している人間としての自分を認める。また浮気によって彼女の嫉妬を誘導し、彼女がもつと自分に依存的になってほしいと考える交際相手の男性を批判しながらも、彼への愛は真剣であると彼女は語る。しかし、それにも関わらず自分が声を上げたらミソジニー的な観点から「bitch」と呼ばれると、彼女はサビで以下のように歌う。

“I’d rather be your B-I-T-C-H (I’d rather keep it real with ya)

‘Cause that’s what you gon’ call me when I’m trippin’ anyway”

「私はB-I-T-C-Hでありたい (私はあなたに正直でありたい) だって、どうせ私が怒るとき、あなたは私をそう呼ぶでしょ」

この曲の「bitch」の用法は、自分に向けて「bad bitch」を肯定的な文脈で使ったII肯定型、他の女性に対する否定的な文脈のII否定型、交際相手の男性をけなす文脈のIO否定型が併用されている。そして「(女性として) 声を上げるとどうせ言われる」という「bitch」を、自ら「それになる」と宣言することで、言葉の意味の取り戻しの意図もはっきり表している。しかしこの曲で彼女が見せる主体性は相手を圧倒する・けなすためではなく、主体的な存在として相手の男性と関係を築いていきたいMeganの希望が曲のメッセージであると解釈できる。自己愛と主体性、ミソジニーへの抵抗と共に自己矛盾、内面化しているミソジニー、関係への希望と愛が混ざっているこの曲から、女性アーティストたちが不完全な「人間」としてヒップホップ中で行動して変化を起こす、ヒップホップ・フェミニズムの実践が読み取れると言えよう。

終わりに

本稿で扱った「bitch」と先行する筆者の研究で扱ったNワード・「ジャップ」・「チョン」・「外人」の分析では、差別用語とそれらが示す社会的ステイグマの関係に焦点を当てたが、楽曲で差別用語を使う動機を表現者と社会的ステイグマの関係だけで説明することは不十分であると思われる。

ヒップホップ音楽の商業化は、その実践者の「黒人」としてのアイデンティティや性的魅力の商品化に繋がった [JonesSteward,

2013]。Condry は、アメリカのヒップホップによって商品化された属性が日本のヒップホップ環境においてどのように欲望され、変容して再生産されたかを探求した [Condry, 2006]。日本の移民コミュニティ出身や人種のマイノリティー、そして女性ラッパーたちの活躍が目立つ近年の日本のヒップホップにおいて、その実践者たちのマイノリティー性を社会的ステイグマとの関係で理解することはもちろん重要であるが、「商品化」の角度からマイノリティー性を理解することも、産業として成長している近年の日本のヒップホップの実践者たちを理解するために必要であると思われる。今後の研究は、ヒップホップにおける被差別性の商品化と、マイノリティーによる自己商品化の観点から差別用語がどのように使われているかを分析し、日米のヒップホップにおける差別用語の使用をより正しく把握して議論することを目指す。

参考文献

- Collins, P. H., 2006, "New Commodities, New Consumers: Selling Blackness in a Global Marketplace" *Ethnicities*, 6(3), 297-317.
- Conway J., 2015, Living in a gangsta's paradise: Dr. C. Delores Tucker's crusade against Gansta rap music in the 1990s. Master of Arts Thesis, Virginia Commonwealth University.
- トマズセン、A. D., <https://scholarscompass.vcu.edu/etd/3812>.
- Galinsky, A. D., Hugenberg, L., Groom, C. & Bodenhausen, G.V., 2003, "The Reappropriation of Stigmatizing Labels: Implications for

- Social Identity" Polzer, J. (Ed.) *Identity Issues in Groups (Research on Managing Groups and Teams, Vol. 5)*, Bingley: Emerald Group Publishing Limited, 221-256.
- Ian Condry, 2006, *Hip-Hop Japan: Rap and the Paths of Cultural Globalization*, Duke University Press.
- Joan Morgan, 1999, *When Chickenheads Come Home to Roost: My Life As a Hip-Hop Feminist*, Simon & Schuster.
- Jones-Steward, C., 2013, Chasing paper: the effects of commodification on the arts and artists of hip-hop culture. Master of Arts Thesis, California State University, Northridge.
- KIM BEOMJOON (金 範俊), 2021, 「アメリカと日本の大衆音楽における差別用語の使用ーヒップホップにおける人種・性別に関する言及を中心にー」大阪大学大学院修士論文.
- 木本玲一, 2009, 『グローバルゼーションと音楽文化ー日本のラップ・ミュージック』勁草書房.
- Mann, S. L., 2011, "Drag Queens' Use of Language and the Performance of Blurred Gendered and Racial Identities" *Journal of Homosexuality*, 58(6-7), 793-811.
- Mathew Oware, 2018, *I Got Something to Say: Gender, Race, and Social Consciousness in Rap Music*, Palgrave Macmillan

註

- (1) 本稿では「nigga」また「nigger」は歌詞の引用を除くは「Nワード」²他の差別用語は「」を使ひて表記する。
- (2) "reappropriate", Merriam-Webster.com <<https://www.merriam-webster.com/dictionary/reappropriating>> (2023年4月27日最終確認)
- (3) "bitch", Merriam-Webster.com <<https://www.merriam-webster.com/dictionary/bitch>>
- (4) 「I get money when I want to / I get bitches when I want to」

- 6ix9ine, 『TUTU』 (2020)
- (15) Power 106 Los Angeles, 2021, "Latto Freestyles Over Yung L.A's "Ain't I" - L.A. Leakers Freestyle #123", YouTube <<https://www.youtube.com/watch?v=Ahg4g3JbsNg>>
- (9) "Life's a Bitch References", Genius.com
- (7) "Life's a bitch, pull them panties to the side now" Kendrick Lamar, 『FEAR』 (2017)
- (8) "Life's a bitch with a pretty face, but she burning" 50 Cent, 『Ghetto Quiran (Forgive Me)』 (2000)
- (6) Gary Susman, 2003, "Eminem issues apology for racist lyrics", Entertainment Weekly <<https://ew.com/article/2003/12/05/eminem-issues-apology-racist-lyrics/>>
- (10) しかし「Nワードパス」は黒人社会全体が共有する概念ではなく、その概念を用いた外集団のメンバー間コミュニケーションが見られる。
- (11) Kevin Lewis, 2019, "Students caught trading 'N-word' passes during lunch at Churchill High School in Potomac", ABC7 <<https://wjla.com/news/local/students-allegedly-caught-exchanging-n-word-passes-at-md-school>>
- (12) djvlad, 2011, "Fat Joe on White Rappers Using the N Word", YouTube <<https://www.youtube.com/watch?v=BRJy48jWIHk>>